



Title	精神科リハビリテーションにおける援助：ある精神障害者共同作業所を事例として
Author(s)	吉谷, 優子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1998, 4(1), p. 40-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56760
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

精神科リハビリテーションにおける援助

－ある精神障害者共同作業所を事例として－

吉 谷 優 子*

WORKING WITH PEOPLE WHO USE PSYCHIATRIC REHABILITATION SERVICE

－ A CASE STUDY OF A SHELTERED WORKSHOP –

Yoshitani Yuko

Abstract

Material and Method

The study is a case study, that adopted a participate observation. A material is a sheltered workshop in Tokyo.

Objectives

In order to clarify the relationships arose between persons that concerned with this workshop.

In order to discuss that the characteristics of the workshop as a field how were influencing the relationships.

Result and Discussion

The members organized some informal groups or some pairs, and harassment had arisen within each members, as other groups in society. Also, relationships that like parent and child had arisen, a message that "you are not adult" spread the members each other.

Some members depended on staffs even if they could to do, and the staffs stimulated members to do it themselves. But sometimes the staffs took roles of helper. Though the members could choose how they be in this workshop themselves freely, a implicit message that "the members must become independent, must not depend" spread through this workshop.

In fact, the members want to be independent, but, on the other hand, they want to depend. Also, nurses always confront with conflict concerning such paradox.

Keywords : workshop, psychiatric rehabilitation, community care, case study

要 旨

研究方法及び研究目的

本研究は参加観察法を用いた、東京都内の1精神障害者共同作業所を対象とした事例研究であり、①作業所にかかわる人たちの間に生じる関係を明らかにすること、②作業所という場の特徴がその関係にどのような影響を与えていたかを考察することを目的とする。

*大阪大学医学部保健学科看護学専攻成人・老人看護学講座

結果と考察

メンバーの間には、社会の他の集団と同じようなグループ化・ペアリング・嫌がらせや、親子に似た関係も生じ、「一人前じゃないくせに」というメッセージが行き交っていた。

メンバーはできることでも職員に依存してみることがあり、職員は自分でやるように働きかけるが、時に頼られる役を買って出ることがあった。この作業所では自分なりのスタイルでいてよいことになっているが、依存を否定し自立を促す空気がある。メンバーは自立したくも依存したくもあり、この矛盾をめぐる葛藤は看護婦も直面する課題である。

キーワード：作業所、精神科リハビリテーション、地域ケア、事例研究

I. はじめに

精神障害者共同作業所（以下作業所と記す）は、精神保健福祉法などのノーマライゼイションの理念に基づいた補助金制度にも支えられて、近年急速に増加し、新しい地域ケアの一つとして、注目を浴びている。

高畠ら¹⁾によると、設立動機はデイケアの終了者の次の行き場所としてというものが多かった。作業所の目的としては、「精神障害者を対象とし、集団労働・集団生活を通して、一般就業もしくは地域での自立生活に必要な力を培う場」²⁾であるという見方もあるが、その実際の在り方は多様性に富んでいる。通所して援助を受ける精神障害者は「メンバー」、「利用者」、「ユーザー」などと呼ばれ、大半が精神病院に入院経験があり、精神科の医療機関に通院中である。

作業所は就業を主に目指すものではない。メンバーは、生計は作業所以外からの収入で立てなければならぬ。作業所ではメンバーは作業や販売、手作りの作品の制作と販売などを行うが、それによる1か月の収入が1万円を越すことは少ない。作業所は、職業を提供する場でもないし、もちろん医療機関でもない。

本研究は、従来の精神病院の枠を越えた新たな援助関係を目指しているある一つの作業所を事例として、そこにかかわる人たちの間にどのような関係が生じているのかを参加観察法を用い明らかにし、作業所という場がそれぞれの構成員にどのような影響を与えているのかという視点で分析し作業所での援助の在り方を考察することを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象

対象とした作業所は、東京都内にあり、約10年前、

都内の静かな住宅街の一角に部屋を借りて開設された。初めは10名足らずのメンバーと1名の職員で、現在と同様に運営委員会が運営する形であった。すぐにメンバーが増え、数年で作業所として借りていた部屋が手狭となり、現在の場所に移転、今度も静かな住宅街ではあるが、付近の一角には小さな工場などが少し集まっている。この移転の時点では、メンバーが10数名、職員が2名となつた。その数か月後に、メンバーが15を越え、職員も3名となつた。

メンバーは、始めから40歳代と50歳代の人が多く、当初は女性は数える程しかいなかった。5年前から、近所の女性の援護寮と交流ができ、それ以来、女性のメンバーが増えて、現在はほぼ男女比は半々である。

2. データの収集

1) 研究期間

研究期間は1995年8月から1996年8月まで。

2) データ収集の方法

週に1日から2日ボランティアとして参加し、そこで起こっていることを観察した。さらに特別な行事にも参加した。

観察したのは、作業所で起きるできごと、メンバーや職員の態度、表情、ことば、行動や、そのときの状況、雰囲気、筆者の中に起きた感情などで、1日の活動の終了後に作業所外で、できる限りすべて記録した。

3) データの分析方法

記録後、スーパーバイザー、ピア・グループと共に、作業所で何が起きていたかを継続的に分析した。その後、データを作業所の視点から分析し直し、考察を加えた。

III. 結 果

1. この作業所の特徴

他の作業所と比較して大きな特徴は、メンバーの就業を目的とせず、活動を通して、自信や生活のリズムを取り戻し、仲間づくりや相談ができ、くつろげる場を目指していることである。また、メンバー一人一人に作業所運営の責任を少しづつ分担することを求めているのも、この作業所の特徴の一つである。

作業所も店も、最寄りの駅から徒歩 10 分内外である。作業所の設備は、20畳ぐらいの作業室と衝立によって仕切られた 6 畳程の畳張の休憩室、必要時は締め切ることのできる 2 畳程の事務室、2 畳程の台所、そして、小さなお手洗いがあり、内部は雑然としているが、窓が広く取られており明るい。この作業所では、徒歩数分以内のところに他にも部屋を借りていて、それぞれ店、事務所、休憩所などとして用いている。

作業所では主に手作業を行っている。併設の店では、メンバーたちの手作り作品と、衣類や雑貨のリサイクル品を販売している。

メンバーから毎月千円の利用費を職員が、また毎月千円のお茶代と数百円の掃除代をメンバーの当番が集めている。作業所の予算は年間 2 千数百万円、うち 9 割以上が都と区からの補助金で、約 2% が他の団体からの寄付金からなっている。店の予算は、1 千万円余り、うち 9 割近くが都と区からの補助金で、約 3% が他の団体からの寄付金である。これらの収支は毎年 4 月ごろ「たより」で公開される。

2. 作業所の活動

この作業所の活動内容は、手作業を中心で、工賃は出来高払い制でメンバーに支払われる。メンバー自身が幾つ作業をしたかをノートにつける。併設の店ではリサイクル品の販売を行っており、仕事は時給制で、こちらも何時間働いたかメンバー自身で工賃のノートにつける。月に一度、メンバーから互選された当番 3 名がノートを見て集計し、一人一人の工賃を封筒に入れて渡す。

3. 作業所の構成員

1) メンバー

この作業所のメンバーは、常に定員の 40 名であった。研究期間中を通じて、男女比は、おおよそ半々であるがやや女性が少ない状態であった。年齢構成は、壮年期の 40 歳代と 50 歳代の人が主で、60 歳代と 20 歳代、30 歳代の

人達が、それぞれ数名ずついる状態であった。

まず、本人が見学に訪れ、見学の結果、本人が参加の意志を持てば、入所の手続きが取られる。定員に空きがあれば入所が可能で、作業所の側でメンバーを選択することはない。常に作業所と併設の店に 40 人がいるわけではなく、作業時間には作業所と店に、ほぼ 1 名から 20 名余のメンバーがいる状態である。

作業所のメンバーは、作業所に入るかどうかを自分で決定したのと同様に、作業所をどのように利用するかも自分で選び取る。

2) 職 員

常勤の職員は 4 名で、週に 1 から 2 日通ってくる非常勤の職員が 3 名いる。この作業所の創設時からの職員は代表者のみで、40 歳台の代表者以外は 20 歳代で、従来からある精神科医療施設を経験せずに、ここに勤めている。

メンバーと職員以外にボランティアや、地域の人たちやメンバーの家族、退所したメンバー、東京都の職員、関連する作業所などの関係者が、この作業所にかかわっている。

4. 作業所内の人間関係

1) メンバー間の関係

作業所の中には、社会の他の集団と同じように、インフォーマルなグループ化やペアリングが生じ、その中で恋愛関係、ライバル関係、孤立、嫌がらせなどが生じていた。

家族に似た関係がメンバーどうしの間に生じることも多い。J さん (20 歳代男性) は、作業所の共用の電話をよく使い、その代金を払わないということで問題視されていた。作業所の電話で頻繁に旅行の予約をしては結局旅行代金が払えず、旅行会社から作業所に苦情の電話が入り、職員が対応していた。J さんは、作業所に通い始める前は、家で同じことをしては父親が対応していたという。ミーティングで作業所の電話料金が急に高くなつたことが問題となり、その後 C さんが、J さんにお金を稼ぐことの難しさを説いていた。J さんは、まったく分かっていない様子で、その後も同じ問題を繰り返し起こした。C さんが J さんに構わなくなると、今度は、K さん (40 歳代男性) が、家の人に隠すような旅行の予約を作業所で相手を替えては、職員やメンバーに父親がわりの役をさせているように見える。

あるとき、K さんに性的嫌がらせをされたと、女性メ

ンバーが、職員に訴えたことがあった。以前にも、同様の問題が繰り返され、その都度ミーティングで話し合って解決を図って来たという。今度も K さん不在のままミーティングで取り上げられたが、C さんは「作業もしないでぶらぶらしているから、問題を起こす。作業させればいい」と言い、また、あるメンバーは話し合いで解決するよう提案したが、解決策は見付からなかった。

結局、K さんのような場合は職員の権限で作業所に来るのをやめてもらうことになった。すると、K さんは親しかったメンバーと、作業所の外でこれみよがしに集まり続けた。

K さんに対して、職員や C さんが、力を持って戯をする父親役を引き受けている。その C さん自身、病気で一人前の仕事ができないために、世間から「一人前じゃないくせに」というメッセージをいつも受取っていて、自分が世間から受取ったと同じメッセージを K さんに発している。そして K さんは、J さんにまた同じメッセージを発する。それぞれ、問題のある子を一人前にさせようとする父親役割をとるという、連鎖ができている。K さんは、陰のグループのリーダーになることで、「父親」に反抗しているように見えた。

一方、他のメンバーとの交流が少なく、一人で過ごすことの目立つメンバーがいる。M さん（40 歳代男性）は、手作業を中心に行い、「貧困で餓死した人もいるんだから」といった理由で、行事やレクリエーションにはほとんど参加しない。作業は猛烈な分量をしており、他のメンバーや職員から働き過ぎと指摘されている。M さんは、働き過ぎては体調崩し、快方に向かってはまた働き過ぎるといったことを何十年も繰り返しているそうである。常に、働いても報われない人という、被害的な役割を保ち続けているように見える。職員や他のメンバーは「働き過ると、調子を崩すよ」と繰り返し指摘することで、M さんに自分の起こしている悪循環に気付かせようとしているが、余りうまくいっていない。

さらに、O さん（40 歳代男性）は挨拶と何か問われたときの返事以外は、非常にことば数が少ない。あるとき、入所したばかりの新しいメンバー P さん（10 歳代女性）が、そばで上手に作業をしていた O さんに作業のやり方を聞いた。普通は、聞かれたメンバーが教えているが、O さんは「他の人に聞いて」とだけ答えた。それを見ていた職員が代わって P さんに教えた。このように、作業所では他のメンバーとかかわりたくないければ、無理にかかわらずに一人で過ごすことを認められる。

2) メンバーと職員の関係

あるときバザーで豚汁と炊込み御飯を賣ることになり、前日にメンバーから希望者を募って料理をつくることになった。Q さん（30 歳代男性）が、野菜の切り方などで意見が分かれたときに「職員の人が決めてくれよ」と言う。Q さんは以前に長年調理の仕事をしていたことがあり、料理は得意なはずであった。そこで筆者が、「Q さんが一番料理が得意だと思う」と言うと、「なんで僕なんだ」と怒った口調になりながらも、「こういう風に切るといいんだよ」と切り方と理由を説明し始めたので、職員もそれにならった。

このようにメンバーは、自分でできることも、職員に頼りにすることがある。職員側も、買って出ることがないわけではない。

あるとき、非常勤職員の S7 さんは休みのはずなのにバザーの日に「手伝うことがあるかと思って」と来て、用意して来た材料で味噌汁を振る舞って、C さんがいらないと言うのに、箸まで揃えて置いて行く。C さんは結局味噌汁には手をつけなかった。また、S7 さんは体の病気を抱えていて、その不調や苦痛をよくメンバーや職員に話し、子どもと同世代の人に、老母を気遣う気持ちを起こさせる。S7 さんの母親のような関わりに対して、C さんのように反発するメンバーもいる。

しかし、職員も母親のような役割を担うことに対して問題を感じていないわけではない。ある日、作業の休憩時間に頂きものの西瓜をみんなで食べることになった。非常勤職員の S5 さんが、率先して切り分ける様子を見て、筆者が「お母さんみたい」と言い、メンバー幾人かそれに同意した。後で S5 さんは、「お母さんみたいと言われ、ぎくっとした。メンバーが大きな子どもに見える時があるけど、メンバーはそういうの嫌がるのでしょうか」と話した。ここには、母親らしさの押し付けに反発するメンバーへの気遣いが見られる。

職員がメンバーの依存の対象となることから、依存の感情が親子のような感情だけでなく、恋愛のような感情に変化することもある。

5. ミーティングとは何か

1) ミーティングの位置付け

作業所の活動という公の事柄から、作業所に直接は関係のない個人的な問題まで、ミーティングの扱う範囲に入っていて、みんなで話し合うべき事柄として位置付けられている。

2) ミーティングの方法

ミーティングには、メンバーも職員も非常勤職員もボランティアも参加する。週に1回ずつ1時間強の時間で持たれる。ミーティングは何よりも優先されていて、メンバーが出席するかしないかは本人が自由に決めるが、ミーティング中には他の仕事はしないことになっている。議題はすべての出席者が出せる。

3) ミーティングの内容と特徴

最も一般的な議題は、作業に関することと行事に関することであり、行事が多いためミーティングでは常に何か行事についての議題を抱えている。これら「いつもの議題」が続いているときは出席者も少なめの傾向がある。

また、ミーティングの議題として、行事やレクリエーションの計画が多く扱われる。一つの行事の計画が実行に移される前に、次の行事の計画を立てることも多い。

III. 考 察

1. 「自ら選ぶこと」の意味

メンバーは自分でこの作業所に通うことを選んで通い始める。さらに、工賃は、自分の責任で仕事の量をノートについて当番が集計し、出来高払い制でメンバーに渡される。生計が立つわけではないが、働いたことの社会的評価として、納得のいく配分は重要である。この作業所では、業者から仕事が入る時点の一ついくらにするかという業者との話し合いからメンバーの意見が問われるが、お金についてメンバーと職員が対等に話す空気がない作業所もある。ここでは、他の作業所と比べても、メンバーの責任が重視されている。

作業所では、管理の仕事をメンバーと職員が一緒にやっている。これは、何でも話し合うという原則を持つミーティングに現われている。工賃の管理や地域とのかかわり方、人間関係上の問題が起こった時の対処、作業の量や他の活動との兼ね合い、作業所の在り方など、管理に関する議題も話し合われる。

個人の活動に目を転じると、作業をすればただけの収入がそのメンバーに入ることで、作業に対しても各々のメンバーが責任を持つ。しかし、就業を目指しているわけではなく、Mさんに「働き過ぎると、調子を崩すよ」と指摘し続けるのは、メンバーを障害を持ったかわいそうな人としてではなく、障害を持ちつつそれとうまく付き合っていく責任を持った人として見ているのである。メンバーに自分の選択、この場合は「働き過ぎる」という選択の結果への責任を求めているのである。

「自分で選ぶ」ということは「自ら責任を取る」ということでもあり、誰のせいにもできない立場に自ら立つということでもある。

これは、他者に対して被害的になったり、「させられ体験」といったかたちで自我を脅かされがちな精神障害者にとっては重要な学習体験となり、治療的な意味があるのである。

2. 自分なりのスタイルで人とかかわること

○さんは、他の人と積極的にかかわらないで居続けることが認められていた。職員は○さんに他のメンバーに教えてあげるように促はしない。○さんは人との苦手なかかわりを強要される恐れに脅かされることなく、無理せず自分のペースで作業しながら居られる。

自分に無理のない作業の量や人とのかかわり方、作業所の活用の仕方をメンバーは自分で選び、調子を崩さずにそこそこの工賃を得たり身を守るという、障害を持ちつつ社会とうまく付き合うということを学習している。

精神障害者は拒否や自閉、ひきこもりといったかたちで自分を守るしかなくなる傾向が強い。そこで、自分を守りつつ外界ともかかわることができるということを学習することが、重要な意味を持つのである。

3. 自立と依存をめぐっての職員のジレンマ

メンバーにとって安心な環境とは、無理をしないで自分なりにいられる環境である。例えば、メンバーたちが手に余る作業を抱え納期が迫っていると、主に職員が残業する。作業所ではこの場を維持するために、陰に陽に職員がメンバーの支持や肩代りをしている。職員は、メンバーが「自分で責任を取る」ことによって自立へ向けて援助する役割を持っている一方で、メンバーの依存を受け容れ、支えるという相矛盾する役割も持っている。

職員がいることで、メンバーが持っている家族関係をめぐる葛藤や不安を活性化させもする。メンバーに対して自立した個人であることを求める一方で、作業所に馴染み、職員を頼りにしてくれることをも期待しているからである。メンバーも、自分でできることでもまずは職員に頼る一方で、職員の世話に反発した。メンバーは依存もしたいし自立もしたいという葛藤を持っており、メンバーと職員の間に子と親のような関係が生じている。

そして作業所では、家族に似たそのダイナミクスの中で様々なことが起こる。例えば、陰のグループができ作業所や職員には表面上は依存していないが職員に反発する別のリーダーの下に集まるといったことや、職員に恋

愛感情を抱いたりすることが起こると考えられる。恋愛感情は、子が親に依存する感情と同じように他者と一体化になりたいという感情であり、性的同一性が獲得された段階での同一化欲求とみなすことができる。

葛藤が生じると職員は、場合によっては、積極的に介入せざるを得なくなる。この作業所の場合、問題が起こったとき、個人の責任の追及があいまいになることが見られた。Jさんの電話事件やKさんの性的嫌がらせの問題などは、ミーティングでJさんやKさん個人の問題としては検討されなかった。

中村³⁾は、ある作業所のミーティングで、この作業所で起こったのと似た性的問題を正面から話し合った過程で、加害者も他のメンバーも行動が変わっていったことを報告している。この作業所では、表では、つまりミーティングでは何でも話し合うといいながら個人の責任を追及せず、裏では個人的に呼んで話をするというように個人の責任を認めている。そのため、個人の問題をはっきりさせれば、作業所の問題もはっきりさせることができたかも知れないのに、機会を逃がしている。

Jさんの電話事件の時は、「一人前であること」をめぐる、今日精神障害者が置かれている社会状況という他のメンバーにも共通する根本的な問題が含まれていたし、また、性的嫌がらせの陰にはなんらかの欲求不満があったかも知れず、それはKさんの問題ではなく、作業所の問題であった可能性もある。そのことは事件後Kさんを中心とした陰のグループが集まっていたことにも現れている。

このことは、職員の直面している不安や葛藤への対策なしには、このような新しい関係の構築が容易ではないことを示している。

4. 「一人前」になることをめぐるアンビバレンス

Jさんの電話事件の時に明らかになったメンバーの「一人前になれ」ということへのこだわりや、性的嫌がらせ事件の時にKさんに発せられた「作業しないでぶらぶらしているから、問題を起こす」という意見は、メンバーたちの間に、どれだけ「半人前」であることや「何もないで『いる』こと」への引き目と罪悪感が存在しているかを示している。武井⁴⁾は、地域患者会の活動の中で「何かをしなければならない」という圧力が強く働き、結果、プログラムが増加しその打ち合わせに時間が費やされる傾向を指摘した。この作業所でも同様に、行事が次々に膨らんでいた。

ところが、武井が述べたように、また、この作業所で

も起こっていたように、「何かしなければならない」とプログラムが増えると、参加者が減りやる気がないメンバーが出てきて、プログラムは遂行できなくなる。

ここには「一人前にはなりたくない」という退行へ向かう気持ちが現れており、声高にはいえないその気持ちを行動化することでアンビバレンスの解消を図っていると見られる。

中井⁵⁾は、精神障害者が「ぶらぶらしている自分」を恥じ卑下する感情はその患者を萎縮させる有害な感情であるとし、現実には患者は治療という大仕事をしていると述べ、その有害な感情の根深さを指摘している。

実際、いわゆる障害者でなくとも、成長という大仕事をしている子どもや人生という大仕事をしてきた老人にとって「ぶらぶら」過ごすことが必要とされるように、あらゆる人にとって人生のある時期には「ぶらぶら」過ごすことや専ら援助を受けて過ごすことが必要なのである。

V. おわりに

本研究では、作業所の構成員についてそれぞれの関係を分析したが、作業所を全体としてとらえるとき、二者関係の和ではない、それら全体としてのダイナミズムが存在する。本研究ではこれを描き出そうとしたが、充分分析、考察しきれなかった。また、作業所の外の社会との関係についても同様である。今後、残された課題について、さらに考えていきたいと思う。

謝 辞

1年あまりにわたって参加させて下さり、励ましてくださった作業所のみなさまにお礼申し上げます。

【引用文献】

- 1) 高畠克子・中村正利・門脇信子・末安勢津子・押川真美・平野敏彦・東健太郎・森理子・窪田彰：利用者にとってのデイケアおよび作業所の意義とデイケアの果たしている機能、病院・地域精神医学、38 (2), 73 - 80, 1996.
- 2) 藤井克徳：精神障害者を主対象とした共同作業所づくり運動の現状と今後の課題、病院・地域精神医学、82, 84 - 92, 1985.
- 3) 中村正利：精神保健活動のミーティング方式とスタッフの役割、病院・地域精神医学、38 (1), 16 - 19, 1996.
- 4) 武井麻子：地域患者会における集団過程について、季刊精神療法、43, 65 - 71, 1985.
- 5) 中井久夫：世に棲む患者、中井久夫著作集 5巻 精神医学の経験 病者と社会、岩崎学術出版社、3 - 27, 1991.

【参考文献】

- 1) 日吉淳治：東京都における精神障害者の社会復帰援助活動，
病院・地域精神医学，82，65－74，1985。
- 2) 石川智子・永井亜紀：障害者もこんなに働けることを証明
できる施設に，ゆうゆう，29，23－28，1996。
- 3) Muff, J.: On Paradox in nursing The Paradox of containing
controlling, Perspectives in psychiatric care, 30 (4), 32
－34, 1994.
- 4) 中井久夫：働く患者，中井久夫著作集 5巻 精神医学の経
験 病者と社会，岩崎学術出版社，28－54, 1991.
- 5) 岡堂哲雄：家族心理学講義，金子書房，1991。
- 6) Obholzer, A. & Roberts, V. : The self-assigned impossible
task, The unconscious at work, 110－118, London,
Routledge, 1994.
- 7) Storr, A.: 人格の成熟，1960, 山口泰司, 人格の成熟, 岩波
書店, 1992.
- 8) 高田征四郎：作業所の工賃はどうなっているか，ゆうゆう，
27, 46－54, 1996.
- 9) 高畠克子・西山詮・皆川邦直・飛鳥井望・三宅由子・7箕口
雅博・上村晶子・宮本真己・広瀬寛子・山村礎・伊藤ひろ
子・小宮敬子：東京都S区におけるリハビリテーション資
源の量的拡大と質的多様性，病院・地域精神医学，38 (4),
8－10, 1996.
- 10) 外口玉子・小松博子：これから的精神保健と精神科看護の
課題，臨床精神医学，25 (1), 9－22, 1996.